

第7回 祥明大学校・熊本県立大学学術フォーラム —人文学とイメージ— 開催報告

米谷 隆史

祥明大学校と熊本県立大学とが姉妹校として交流をはじめたのが1989年。本年度で実に四半世紀を経たことになる。2008年からはじまった共同学術フォーラムも今回が第7回目。祥明大学校天安キャンパスにて2014年9月19日の開催であった。

祥明大学校副総長のヤン・ヨンジュン先生の祝辞の後、両校より2名ずつ、計4名による研究発表が行われた。

冒頭は、祥明大学校ジョン・ウィジン「超現実主義と1' Art primitif —アンドレ・ブルトンの議論を中心に」。第一次世界大戦後の西欧における文学芸術の一潮流である「超現実主義」の提唱者であったアンドレ・ブルトンの政治的立場とその思想形成上の問題点を指摘したものである。多くの文芸思潮と同様、「超現実主義」もその運動が広がり、影響が大きくなるにつれて内部的な対立を包含していくこととなる。ジョン氏は、そうした中でブルトンが、文学芸術が政治理念に一方的に従属することに生涯強く反発し続けたことの意義を改めて考えてみる必要があることを主張した。さらに、ブルトンによる「超現実主義」運動の展開過程においては「原初芸術 (art primitif)」への関心とその収集が大きな意味を持つとし、ブルトンが自身のアトリエの壁一面に、「超現実主義」の画家達の作品と非ヨーロッパ大陸のオブジェとを260点余り実験的に配置して思索をめぐらせた試みは、生涯、植民地国家の独立運動を支持した彼の政治的な立場とも軌を一にするものと述べる。

次は、本学の米谷隆史「江戸時代における漢字の書体と筆画数との関係について」。漢字の骨組みである「字体」が、纏っているデザインともいべき「書体」に影響を受けてしまう事例を江戸期にさかのぼって示し、その上で、現代の文字社会が歴史上いかなる地点にあるかを述べた。具体的には、1693年刊行の『四書画引』という画数順配列の漢字字書において、「女 弓 彡」は3画、「片 欠 今 辶」は4画というような凡例が示されていること、また、こうした凡例が必要となった背景に『四書』の版本が明朝体で出版されるようになった（例えば「女」の場合、

明朝体による字形であれば、1画目の「く」の部分が2画に分かれているようにも見えるし、明朝体「辶」は手書きや明朝体以前の印刷書体では多く「辵」であったことが存する旨を指摘した。その上で、2010年改訂の「常用漢字表」に新たに追加された「遡」「遜」「謎」の「しんにょう」部分が、旧来からの「途」や「道」とは異なり、「辶」を標準とすることとなった背景には、江戸期から進行してきた手書き書体重視から印刷書体重視の流れがあることを述べた。

次いで本学の難波美和子「人文学＝Humanities, 天文学＝Astronomy?」。現代社会が抱える環境・宇宙開発・再生医療をめぐる生と死への医学の介在等の問題に対して「人文学」が語りうることを獲得するために必要な思索の一端を示したものである。詳細は、本誌56頁の講演記録を参照されたい。

掉尾を飾ったのがヤン・ドングク「日本近代文学の中の〈地図〉－韓国併合と結びつけて」。泉鏡花「高野聖」のような幻想的な作品であっても主人公が頼りとするのは「参謀本部編纂の地図」であった。日本の近代において、「想像の共同体」を共有する「国民」による国家が形成されるにつれて俎上にあげられることの多くなった〈地図〉に焦点を合わせ、石川啄木と竹久夢二の作品に〈反近代の精神〉を読み取ろうとする試みである。1910年の韓国併合の年、石川啄木が詠んだ「地図の上朝鮮国に黒々と墨をぬりつつ秋風を聞く」は広く知られた作品である。「黒々」「秋風」から啄木の胸中が知られよう。日本の植民地に転落した朝鮮に「国」の字をつけたことにも注目しておきたい。また、金志淵氏の発見にかかるところであるが、竹久夢二が『月刊夢二カード』の一シリーズとして刊行した「日韓合邦記念」絵はがきも見逃すことはできない。日本人・韓国人の少年・少女が婚約、新婚旅行へと進む4枚組の絵はがきは、両国を取り巻く擬人化された列強の姿や二人が纏う装束の変遷、さらに傍らに配される地図などととも解釈するならば、冷徹な国際感覚に基づく政治風刺が込められていると見るべきなのである。

それぞれの発表に対してはコメンテーターによる質疑がなされ、議論が深められた後、祥明大学のキム・ユウチョン氏と本学に着任の崔^{チェムンヒ}文姫氏の両名による全体総括で会が締めくくられた。

筆者（米谷）の場合は、日本に先んじて（と言うのが正しいか否かは、将来の日本の漢字政策にかかわるが）漢字の使用範囲をごく狭くする政策を採った韓国の側から、日本の今般の漢字政策がどのように見えるのかという点が興味深かった。また、ジョン氏とヤン氏の発表が期せずして、いずれも知識人が保持した政治への距

離感に目を向けたものであったことは、今現在の両国の論調一般を思うときに感慨深いものがある。

「イメージ」というテーマを思い思いの視点から捉え、多様な研究発表が展開されたわけであるが、参加し発表をして感じたのは、こうしたフォーラムが既に日常の研究教育風景の一部になっているということである。両校の研究者が披露する知見が、時に日本語で、時に韓国語で、時に英語で、時にはそれらを交互に用いて、お互いに伝え合う努力がなされ、教員達のみならず出席した両校の学生にとっても頭脳を十分に回転させる場として機能している。そして、夕食の卓を囲む懇親会から二次会へと進んでも議論は止むこと続いた。日常が惰性に傾くことへの注意はむしろ必要であるが、こうした場が当たり前のように存在することに長年の交流の蓄積を感じるのである。有り難い機会に居合わせたものと感じている。



フォーラム終了後、両校の学生・教員とともに